

水化学国際会議（NPC 2014 札幌）報告

1. 実施報告

NPC 2014 札幌の会議の技術的な報告は[こちら](#)を参照願います。

2. 実行委員長所感

NPC 2014 SAPPORO を終えて

実行委員長 勝村庸介

NPC 2014 札幌が無事終了し、重荷を下したような気がする。考えてみれば、4年間の長い、長いマラソンであった。これまでいくつかの会合やシンポジウムの企画、開催に携わってきたが、これほど長期に渡ったものはなく、また通常のマラソン以上に後半になればなるほどスピードアップして密度は上がった。何しろ、最終回であった第19回 NPC2014 札幌実行委員会、第15回 RADEM'14 準備委員会の回数がこの長丁場を示している。無事ゴールに到達したわけであるが、その間に二つの大きな通過地点があったように思う。一つ目は勿論、福島事故後の開催方針堅持の判断であった。2010年のカナダ、ケベックで開催された NPC 2010 のコアメンバー会議にて NPC 2014 札幌開催が採択された。それから半年経過しないスタートの時点で、福島事故により NPC 2014 開催続行か、断念かの決断を迫られたことである。2011年は秋にアジア水化学開催を JAEA が中心になって計画していた。この会議は当初、予定していた韓国開催が困難であることから、日本が肩代わりで実施予定となったものである。アジアにおける水化学は日本が牽引するという気持ちがあったためである。震災後の混乱を考えれば秋の開催中止は致し方なかった。しかし、そうした状況の中でも NPC 2014 については容易に返上させない、こんな中でこそ開催することが日本の役割という、こちらも強い責任感を関係者全員が共有していたからである。2011年10月18日の水化学小委員会に検討WGから実行委員会の設置提案が出されている。そこには、(1) 以前日本で開催した時に比べて、国、産業界からの従来通りの経済支援が困難であり、水化学部会自らの推進の必要、(2) 経済的基盤強化のための活動推進、(3) 趣意書、事業概要書作成、(4) 一部業者委託、(5) 事業・運営計画書および予算書作成、(6) 2012年夏に第一回組織委員会を開催、などが提案され本格的なスタートを開始した。二つ目の通過点は、第一回の組織委員会であった。2012年5月18日原電本店で開催され、水化学関連の委員に強力な支援を頂けるよう強い願いが込められていた。今から思えば、これが経済基盤強化のための行動の第一歩であったように思う。さらに、秋には NPC 2012 PARIS が開催され、当初プログラムに入っていない飛び入りの「東電事故」報告を行うとともに、NPC 2014 の日本開催を高らかに宣言した。これ以降は懸命に各人が役割を果たし、札幌会議に突入した。

NPC 2014 が多数の参加者を得て、成功裏に終了できたことは実行委員会メンバーの献身的活動、組織委員会の強力な支援、地元、北海道電力、商工会議所、株式会社 ISS さん、さらには多くの皆様の会議参加、発表、関連各社の展示、広告、会議運営上の支援など、これらの融合の賜物で、どれが欠けても到達できなかつたであろう。NPC 2014 SAPPORO を終え、皆様に深く感謝している。

3. 実行委員所感

3. 1 企画／渉外担当グループ（日本原子力発電 久宗委員）

企画／渉外担当グループは、水化学国際会議 2014 札幌（正式名称または NPC2014 札幌で統一する場合は修正願います）において、以下の業務を担当するためグループ員が協力して準備および実施してきた。

- (1) 事業計画・運営計画の策定・実行・改訂・報告に係わる事項
- (2) 経済基盤確保・強化策の策定・実行に係わる事項
- (3) 開催準備・運営に係わる委託業者との調整

(1) 事業計画・運営計画

水化学部会としては、初めての水化学国際会議の開催であったため、国際会議開催～運営に係る必要事項を洗い出し、スケジュールリングを行った。

また、水化学部会員によるボランティア活動には限界があるため、必要最小限の業務については委託することとし、企画／渉外担当グループが窓口となり調整した。

(2) 経済基盤確保・強化策

水化学国際会議を参加登録費で運営するため、① 参加登録者数の確保、② 公式行事スポンサー、③ 展示ブース、アブストラクト広告等による経済基盤確保に努めた。

2012年にフランス パリで開催した NPC2012Paris や国内開催の各種学会等での PR 活動の効果により、参加登録者数は 358 名と当初計画（250 名）を大幅に上回る参加登録者数となった。

また、日本で開催する水化学国際会議においては、初めて公式行事等のスポンサーを募集し、関連する企業から予想を上回る申込みを頂き、国際会議運営に係る経済基盤の確保・強化することが出来た。

ここで、改めてスポンサーとしてご協力頂いた企業に御礼申し上げます。

(3) 開催準備・運営

当初参加登録者数の目途が得られなかつたため、250 名をベースに準備を進めていたが、参加登録々切り直前（9 月末）に参加登録者数が急増したため、メイン会場の席数および配置変更、レセプション、コーヒープレイク、バンケッ

トの数の大幅な変更が発生したが、開催主催者としては嬉しい悲鳴であったと考える。

今回の水化学国際会議は、会議開催準備段階から会議開催中の運営について、運営会社に運営を委託したため、会議の進行に応じたコーヒースタンドやランチの準備が適確であり、会議参加者のストレスを軽減できたと考える。

また、運営会社が作成した運営マニュアルに必要事項が全て記載されていたため、会議の運営および進行を十分理解した上で対応できた。

水化学国際会議を日本で開催するのは18年ぶりであり、開催準備および運営も水化学部会員のボランティアで行う条件の中、NPC2012Parisの運営状況調査や実行委員会での議論により、水化学国際会議を円滑に開催および運営できた。

また、組織委員会、実行委員会の所属機関の協力により、多くの参加登録者数を確保できたこと、多くのスポンサー企業の協力により、円滑な会議運営ができた。

次回の日本での水化学国際会議の開催は数年後となると考えるが、次回の開催についても今回の経験を生かしていくことを期待する。

3. 2 プログラム担当グループ（電力中央研究所 河村委員）

（1）NPC2014を終えて

これまでの水化学国際会議の中で参加者数が最多となった”NPC2014 札幌”は、大きなトラブルに見舞われることなく、参加者からも好評で、NPC2014を成功裏に終えることができました。これは、会議参加者、会議運営会社（ISS）ならびに NPC2014 実行委員の多大なるご支援、ご協力に依るものです。深く感謝いたします。

福島事故対応に関する特別セッションでは、TMIの事故処理に中心となって対応された Chuck Negin 博士および東電関係者からの講演に加え、廃炉措置等に向けた中長期 RM の状況およびオフサイトでの除染状況について、経産省および環境省の官房審議官からそれぞれ講演戴けたことも、参加者の満足度アップに繋がったものと考えます。

これまで、同国際会議ではシングルセッション方式による進行が常でしたが、今回は、特別セッションとして福島事故関連のトピックスを取り上げたため、論文応募数も過去最多となりました。このため”NPC2014 札幌”では、初の試みとしてパラレルセッションを設けました。運営方法に不安がありましたが、会場担当者の適切な準備と進行もあって、参加者からは好評を戴くことができました。

（2）プログラム編成で苦労した点

口頭発表者が国別、所属機関別に偏らないよう配慮しつつプログラム編成作業を行いました。思いのほか大変でした。また、来日できるか否か会期直前ま

で不明であった国外招待講演者がおりました。このため、招待講演者が参加できないケースも想定しながら準備を進めました。お蔭でドタキャンに対しても的確に対応することができました。今回、初の試みであったパラレルセッションの設定については、シングルセッションの長所も活かしつつ運営するためプログラム編成面での工夫が必要で、かなり苦心しました。水化学分野に対する期待、関心が世界的に広がり、論文数が漸増している中、この経験を蓄積し、次回以降の会議運営に引き継がれることを願います。

(3) プログラム編成の反省点

本国際会議は、2年に1回、欧州、北米およびアジアの3地域での持ち回りで開催されており、次に日本で開催するのは、少なくとも8年後以降となります。次回の参考になればと考え、主な課題（反省点）と対策を簡単に記します。

課題	原因	改善策案
1 セッションのトピックスと口頭発表論文の内容との不整合	<ul style="list-style-type: none"> ・国別、機関別によるバランス重視に苦心するあまり、仕方なく設定したため。 ・締切りの関係上、論文タイトルとアブストラクトのみで判断したため。 ・予稿原稿入手後、不整合に気付いた件もあったが、混乱を避けるためプログラム変更は行わなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アブストラクトにキーワードを記載する。 ・予稿原稿の締め切りを早める。 ・国別、機関別によるバランス重視の考え方を再検討する。 ・委員を増強する等、編成のチェック機能を強化する。
2 予稿集の誤植	<ul style="list-style-type: none"> 招待講演の予稿の入稿が大幅に遅れ、チェック時間を十分に確保できなかったため。 	<ul style="list-style-type: none"> ・予稿原稿の締め切りを早める。 ・締切り違反者に対するペナルティを課す。 ・ミス防止のため、実行委員によるチェック機能を強化する。

(4) おわりに

水化学分野で最も権威ある水化学国際会議において、プログラム委員長を仰せつかり、その重責と業務量の多さに押しつぶされそうになりつつも、何とか責務を果たすことができました。ひとえにプログラム委員をはじめ実行委員の皆

さま方の多大なる協力の お蔭と考えております。改めて感謝申し上げます。
次回の国内開催時には、我が国が福島事故から見事立ち直り、エネルギーのベストミックスとして原子力発電を的確に位置づけていることと考えます。そして、経済面、産業面でも世界を再びリードしていることはもちろん、高経年化対策技術、先進的な廃炉技術等、安全・安心ブランドをまとった日本の技術と研究成果を世界に適確に発信できていることを期待します。

3. 3 会計担当グループ（オルガノ 大橋委員）

【会計担当として】

スポンサーや参加者が順調に集まったため会計グループとしては特別な努力も無く健全な収支を達成できた。これはひとえに企画渉外グループや広報グループの方々の御活躍と、実行委員各位の参加者獲得に向けた御努力によるもので、会計担当として感謝申し上げます。

実作業における感想としては、海外からの参加者で銀行振込を選択される方が多かったのが意外であった。銀行からの入金内容の確認依頼は口座開設者（大橋）に来るため、海外からの送金がある度に申込額との相違や参加者と振込者の照合を行うのが唯一仕事らしい仕事であった。

まだ最終的な支払処理と学会への会計報告および寄付金納付が残っており、年度末までの処理を目指して作業を続けます。

【受付担当として】

会議期間中は受付責任者を担当し、アイエスエスの受付担当者の方々の活躍を間近で拝見することになった。どの方も国際会議運営の専門業者としての能力を如何なく発揮され、英語での案内や問い合わせへの対応は時折ユーモアも交えて非常にスムーズであった。初日にクレジットカード清算用端末が不調になるなどいくつかトラブルはあったものの全体としては問題なく乗り切れた。これをボランティアベースで手伝う羽目にならなくてよかった、と収支に余裕があるありがたみを痛感した。

反省点としては、バンケットへの参加有無を申し込み時の自己申告のみで判断したため席に余裕があったにもかかわらず一部の重要参加者が参加を見送ったことである。国際諮問委委員やコアメンバーの公式行事への申し込み状況を事前にチェックし、受付時に再確認するべきであった。

【会議全体を通じて】

一部の参加者の方から「会議の進行が完璧にコントロールされており素晴らしい」との感想をいただいた。これは発表や公式行事がトラブルなく常に時間通りに進行していくのに感心しての発言であったが、見方を変えると発表に対する質問や議論が少ないということでもあり、今後の反省点としたい。

3. 4 広報・編集担当グループ（電力中央研究所 藤原委員）

広報・編集担当としては、電子メールやインターネットを活用し、効率的な情報発信を行うこと、また、国内外の関連組織・学会の協力を得て広範囲な広報活動を行うことを基本方針として、活動を行ってきた。

本大会で開設した専用のWEBページの作成・メンテナンスは、基本的に業者に委託し運営した。WEBページの更新など献身的に対応いただき、大きなトラブルもなく効率的な運営が行われたものとする。

個別の情報発信については、近年では厳格な個人情報の取扱いが求められており、名簿を充実させることが難しい状況ではあったが、AESJ 情報配信サービスや 2010 年および 2012 年の国際会議の参加者名簿など入手が可能な情報を活用するとともに、バックエンド部会、核燃料部会、材料部会、熱流動部会、保健物理・環境科学部会、発電部会の皆様にもご協力いただき、広く情報を配信することができたと考えている。また、日本保全学会、腐食防食学会、日本機械学会、日本原子力産業協会などのご協力により、種々の大会等の会場において Call for Paper を配布することができ、また、材料と環境、Power Plant Chemistry Journal など一部の学会誌には案内文を掲載いただくことができた。

国外の方々には、ご後援頂いた海外原子力学会やその他の機関・団体、そして国際諮問委員の方々のご協力により情報を配信することができた。

Abstract 〆切までに行った一斉配信は計 7 回、学会の情報配信サービスは計 4 回である。Abstract 募集開始当初は、皆様からの反応も弱く、郵送による案内の不実施など、情報発信が不十分であったのではないかと不安も抱いたが、最終的には国内、国外ともに数多くの方々に会議にご参加いただき、目標とした人数を上回る結果となった。電子メールやインターネットによる配信も有効であったと思うが、それだけでは、今回の成功にはつながらなかったと考える。種々の局面で皆様の献身的なご協力があったおかげであると感じている。ご協力いただいた多くの皆様のご尽力の賜物と深く感謝している。

さて、実行委員として国際会議の準備・運営に初めて携わることができ、多くのことを学ぶことができたと思う。広報活動の進め方など、何から手を付けてようかわからない状況でスタートしたこともあり、実行委員会の方々には大変なご迷惑をおかけしたことと思う。この間、終始暖かい激励とご指導、ご鞭撻を頂いた実行委員会諸氏に感謝する。

最後に、NPC2014 札幌の各セッションでの発表概要などをまとめた実施報告を作成した。部会の WEB ページより閲覧可能である。併せてご覧いただきたい。
http://www.aesj.or.jp/~wchem/NPC2014_report.pdf